

美術科

西澤 明

研究協力者 金沢大学 鷺山 靖

1. ESDを進めるにあたって

美術科の実践をまとめるにあたって、理解（筆者自身も含めて）のために、本校の研究の主題であるESDの概要と研究の方向について、簡単にまとめておく。

（1）ESDとは何か

ESDはEducation for Sustainable Developmentの略称で、「持続可能な開発のための教育」を意味している。

「持続可能な開発」は、環境・貧困・人権・平和・開発といった、世界中にある様々な地球規模の課題に対して、将来の世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズも満足させるような社会づくりをめざすものであり、「環境の保全」「経済の開発」「社会の発展」の三つの調和を基本としている。（図1）

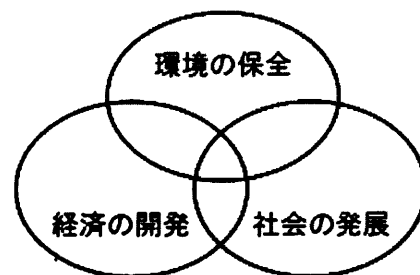


図1（内閣官房）

「持続可能な開発」のためには、一人ひとりが世界の人々や将来の世代とつながっていることや、環境との関係性の中で生きていることを認識し、その課題を見いだすことが大切である。課題解決のために自分にできることを考え、実践していく（think globally, act locally）ために必要な能力・態度を育む「教育」が、ESDである。

（2）本年度本校研究の方向（ESDで育む能力・態度）

本校のESD研究の拠り所の多くは、国立教育政策研究所教育課程センターの学校向け資料¹に求めている。

「ESDの視点に立った学習指導の目標」について、資料には以下のように示されている。

● 学習指導の目標

持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける。

この「課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度」については、学校教育法に示された「確かな学力」の三要素²における、「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」と同様と考えられる。つまりESDは、これまでずっと言われ続けている思考力、判断力、表現力等の育成を、「持続可能な社会づくりに関わる」内容で行うものであり、「思考力・判断力・表現力等」を育むための一つのテーマと捉えることができるだろう。

さらに資料では、目標に示された「能力や態度」について、重視する例として①から⑦の「身に付けたい力」にまとめられている（次ページ）。

¹ 国立教育政策研究所教育課程センター『ESDリーフレット「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」』および『「持続可能な開発のための教育(ESD)」はこれからの世界の合い言葉 みんなで取り組むESD！－持続可能な社会づくりを目指した取組に向けて－』。

² 『学校教育法（抄）』（一部改正：平成19年法律第96号）第4章、第30条、第2項、第49条、第62条等。

● 身に付けたい力 ※ア～クは本校による。⑤～⑦の具体的な指導の観点については「全体論」参照。

① 批判的に考える力（代替案の思考力）

ア. 「事実と、事実に加えられた「考え・意見」を見分けることができる。

イ. 二者間の意見を踏まえて自分の意見を建設的に述べるができる。

② 未来像を予測して計画を立てる力

ウ. 過去や現在の情報に基づいて、将来を予想・予測することができる。

エ. みんなと話し合っって計画を立てることができる。

③ 多面的、総合的に考える力

オ. いろいろな側面やいろいろな人の立場から物事を捉えることができる。

カ. 学校の学習内容と実生活の身の回りの環境とのつながりを考えることができる。

④ コミュニケーションを行う力

キ. 自分の気持ちや考えをうまく人に伝えることができる。

ク. 他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行うことができる。

⑤ 他者と協力する態度

⑥ つながりを尊重する態度

⑦ 進んで参加する態度

本年度の本校研究では、この七つの「身に付けたい力」のうち、具体的に「力」と表記された①から④の四つを「思考力・判断力・表現力等」と直接関わるものとして取り上げ、それぞれの力の育成を各教科等の授業、学習活動で行った。さらに、四つの力のそれぞれについてより具体的な観点を独自に設定（アからク）することで、各教科等の計画、実践を行いやすくするとともに、その観点を元に、各教科等における「能力・態度のつながり」を図った。

2. 能力・態度の育成にあたって

（1）美術科の授業における能力・態度の育成について

美術科の学習では、スケッチ等の絵画活動や模刻等の彫刻活動において、目に見える対象をそのまま写し取る表現活動が行われる。写真のようにそのまま写し取る知識・技能を学ぶ目的もあるが、それだけでなく、見たものを一度自分の感性のフィルターに通し、何らかの制作の意図やテーマ、イメージを表現することが目的になることが多い。さらに目に見える事柄を対象にするだけでなく、心の風景や想像の事柄等、そもそも目には見えない事柄を対象にした表現活動も行われる。

美術科において育てたい能力には、もちろん教科としての基礎的・基本的な知識・技能もあるが、それ以上に大切なのは、活動において制作の意図やテーマ、イメージをしっかりと持ち、それを表現し、伝える能力であり、さらにその活動を主体的に行う態度である。目に見えない制作の意図やテーマ、イメージをどんな方法で表現するか考える場面、視覚表現として相手に伝える場面は、まさに「思考力・判断力・表現力等」を必要とする活動であり、その育成を図れる活動である。

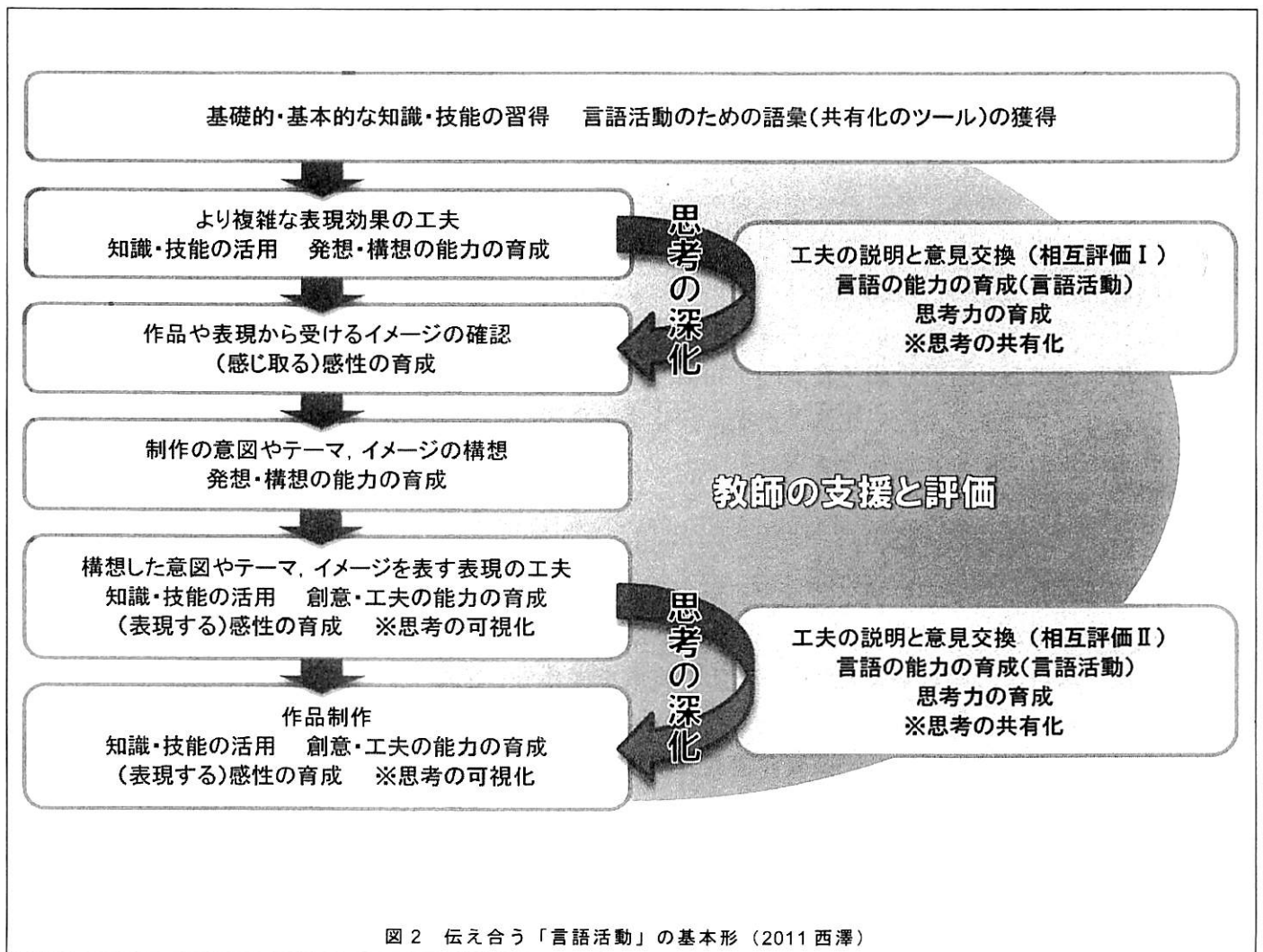
美術科の表現活動においては、言葉だけではなく、素材、技法、表現効果、制作の過程、作品等が

「言語」であり、考えを相手に伝えるコミュニケーションのツールであることは、これまで行ってきた「言語活動」や「思考力」をテーマにした研究実践でも明らかである。そうした背景を踏まえ、美術科では、本校の研究で焦点を当てることになった①から④の四つの力のうち、「④ コミュニケーションを行う力」－自分の気持ちや考えを人に伝える」を主たる課題として取り上げ、本年度の実践を行うことにした。

(2) 深い学びの過程について

今回美術科では教科の思考力を、「学習活動の中で生じたり設定されたりする課題を、さまざまな思考の方法を用いて考える力」と捉えた。美術科の表現活動は、発想・構想した制作の意図やテーマ、イメージをよりよく実現するためにどうすればよいかという課題を見だし、その課題の解決のために知識・技能を活用し、感性を働かせて創意・工夫をする繰り返しである。その活動は、美術科における思考力（判断力）の育成の場面である。

ここでいう感性については、学習指導要領にもその育成が明確に示されている「教科の目標」の一つである。これまでの研究実践で、イメージを受け取る「感じ取る感性」と、制作の意図やテーマ、イメージを可視化する「表現する感性」の二つの場面を想定しており、その二つの場面を意識した学習活動を行うことで、より「思考の深化」が行われることが、推察されている（図2）。能力・態度の育成における「深い学び」については、この「思考の深化」のプロセスが活かせると考えた。



(3) 教材のつながりについて

教材のつながりについては、国語科の題材「大人になれなかった弟たちに……」を題材に、昨年度に引き続き、鉛筆の技法とその表現効果を使った実践を試みた。

感情や気持ち、音、温度、手触りといった「目に見えないもの」を、鉛筆を使って表現する授業自体は継続して行ってきており、基本的な描画用具である鉛筆の可能性については成果も挙げてきている。しかし当初は、単純に「目に見えないもの」をテーマにしていたため、視覚的な作品の完成度は高かったものの、内容はやや表面的だった。「大人になれなかった弟たちに……」を題材にしたことで、生徒たちは感情や気持ちの視覚化という、表現活動において最も重要な課題に向き合うことになった。他者の感情や気持ちに寄り添う資質や態度を育てることは、美術科として重視する目標であるのと同時に、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度でもあり、大きな可能性を持った取り組みだと考えている。

3. 成果と課題

(1) 成果

1年生「大人になれなかった弟たちに……」については、ここ数年の同単元の研究実践で、教材、単元の形はほぼできあがった。鉛筆という基礎的・基本的な描画用具についても、そこで取り上げる目に見えない事柄というテーマについても、教科の目標の実現、思考力・判断力の育成という課題に対して、大きな可能性があるように思う。

2年生「表札レタリング」については、長く続く単元であり、さまざまな基礎的・基本的な知識・技能の習得目標の設定、上級学年の作品を観ることによる主体的な発想・構想の喚起、作品が生活に置かれるよさの体験など、多くの学びが期待できることが明らかになっている。個々の作品の表現の違いが作者の意図とともにわかりやすい点も、今後ESDの視点に立った学習指導に結び付けられると考えられる。

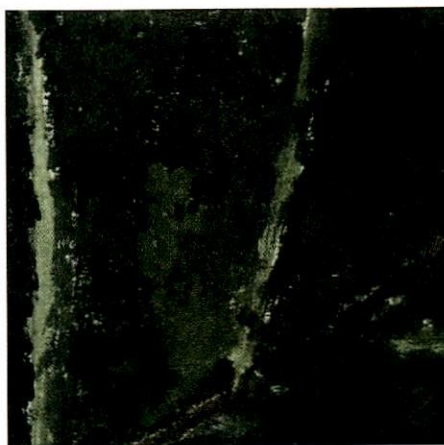
3年生「柏葉のスケッチ」については、上記「表札レタリング」と同様、伝統的かつシンプルな単元だが、美術科における基礎的・基本的な知識・技能の習得とその活用という目標を十分に実現できる単元である。今年度は着彩の技法を整頓、具体的に学習したことで、一人ひとりの作品の表現の違いがこれまで以上に明確になったように思う。

(2) 課題

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度は、これまでの学習指導で重視されてきたものと大差はない。確かに、「教材のつながり」はESDの視点に立った指導を進める上での留意事項であり、実際に、教科における学習理解や思考力の育成を深める「手立て」としては有効である。今年度は、ESDにおける「コミュニケーションを行う力」に焦点を当てた実践に取り組んだが、考えを伝え合うために、言葉だけではなく作品等の視覚表現を用いることができる、美術科ならではの取り組みを、より意図的、積極的に行うことが求められる。

さらに、一つの課題に対し、一人ひとりの表現が異なり、しかもそのすべてに価値があるという表現教科の独自性は、ESDにおける「多面的、総合的に考える力（いろいろな側面やいろいろな人の立場から物事を捉えることができる）」の育成にも可能性があるように思う。

3年生「柏葉のスケッチ」に見るさまざまな表現



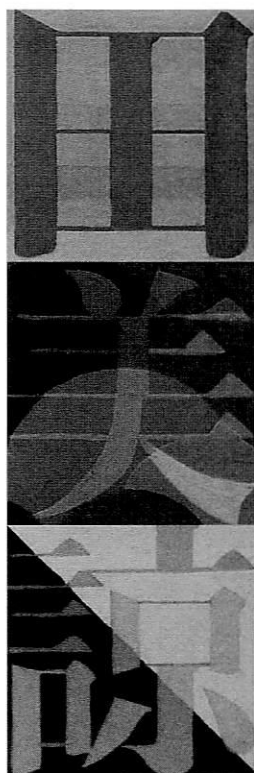
1 題材名 表札レタリング

2 ねらい

- 手本を正確に写し、色の基礎的な知識を用いた配色と画面構成を行うとともに、ムラなく・はみ出さずに絵の具を塗ることができる。
- 制作の意図を構想し、主体的にその意図を実現するための表現の工夫を行うとともに、その意図や工夫を言語や実作品で説明できる。

3 学習活動

- 身の回りの美しい色彩や形は多種多様で、豊かな生活の中にはなくてはならないものである。この教材では、完成した作品が教室前廊下に掲示されることで、学級集団や学年集団、先輩の作品や卒業生の作品を日常的に観ることができ、集団を形づくる様々な個性に触れることで、その存在や価値に対する理解が育つと考えられる。【構成概念Ⅰ】



- どのような色彩や形を用いて、どんな作品を作るかという制作の意図を考え、実現するためには、1年生の時に学習した「色の知識」や「絵の具の塗り方の技能」を用いることになる。同じ取り組みを通して、知識・技能のより確かな定着を図るとともに、知識・技能を活かして、より高度な作品を制作することになる。【習得・活用】
- 長く続けてきている教材であり、作品の多様な表現は、多くの生徒にとって、こんな作品を作ってみたい、真似してみたいというあこがれになり、関心・意欲の動機付けや主体的な学びにつながることで、これまでの実践で、すでに明らかになっている。あこがれる作品の色彩や形、技法を同じように再現するにはどうすればいいかという課題に対し、これまでに学習してきた知識・技能を工夫し、表現する活動は、美術科における思考、判断、表現の力だと考えられる。【身に付けたい能力・態度①】
- 配色計画と画面分割を構想する段階で、友人に自分の考えを説明する活動を行った。1年生の時に学習した「色の知識」の語彙を共通言語（ツール）として用いることで、より相手にわかりやすく伝えることができる「言語活動」の取り組みである。それと同時に、相手の意見を傾聴し、自分の考えの参考として活かすことで、「深い学び」にもつながっていくと考えられる。【身に付けたい能力・態度①】

4 ESD との関連

(1) 構成概念

I 多様性…集団を形づくる様々な個性の存在や価値に対する理解。

(2) 能力・態度

- ④ コミュニケーションを行う能力 キ 自分の気持ちや考えを、わかりやすく人に伝えることができる。

【教科等の力】既習の「色の知識」を用いながら、自分の考えを相手に伝える力。

(3) 教材の「つながり」

- ① ESD 関連分野 人権

1 題材名 柏葉のスケッチ

2 ねらい

- 本校の校章のデザインでもあり、ホールの名前や文集の名前にも使われている「柏」の葉を描くことで、学校に対する誇りや関心を喚起するとともに、集団に対する所属意識を持つ。
- 柏葉の形や色彩を観察することで、自然物の美しさに気付くとともに、よく見ることについて理解する。
- 絵の具の基礎的な技法を理解し、主体的に意図を実現するための創意・工夫を行うとともに、その意図や工夫を言語や実作品で説明できる。

3 学習活動

- よく見ることは目に見える形や色、大きさや数等を見るだけでなく、手触りや温度、匂いなど、目に見えないものを心の目で見ることでもある。
- 目に見えない事柄を表現するためには、どんな材料や描画用具を用いるかが重要である。今回は基礎的・基本的な描画用具である鉛筆と水性絵の具を取り上げ、その技法や表現効果を学習することにした。

鉛筆については、1年時の「大人になれなかった弟たちに……」、2年時の「自画像」の題材でその幅広い技法について学習してきており、今回の「柏葉のスケッチ」でも、その知識・技能を活用して取り組むことが期待できる。

同様に水性絵の具についても、水の溶き具合や重色、「レタリング表札」におけるムラなくはみ出さない着色の方法について学習してきている。しかし、スケッチにおけるより自由な表現は経験してきておらず、生徒の多くは絵の具を混色することをせず、既製の生の色をそのまま使うことが多い。そのため、柏葉の豊かな緑を表現するための描画技法として「たらしこみ」と「ドライブラッシュ」の学習をし、それを活用してスケッチを行うことにした。

鉛筆と水性絵の具の扱いについては、鉛筆による下書きに着色とせず、それぞれを描画用具として平等に扱うことで、より幅広い表現ができるように指導を進めた。

- 制作を進めることで、生徒一人一人から様々な表現が出てくる。制作途中で自分の考えを説明し合う時間を設けることでコミュニケーションも図れ、完成後にお互いの作品を観あう機会を設定することで、それぞれの工夫やよさを確認し、味わうことができると考えられる。



4 ESD との関連

(4) 構成概念

I 多様性…集団を形づくる様々な個性の存在や価値に対する理解。

(5) 能力・態度

- ④ コミュニケーションを行う能力 キ 自分の気持ちや考えを、わかりやすく人に伝えることができる。

【教科等の力】既習の表現技法を用いながら、自分の考えを相手に伝える力。

(6) 教材の「つながり」

- ① ESD 関連分野 人権